LIP in HIRAKATA

ＬＩＰ（りっぷ）は、枚方市民発の
福祉・教育・文化・環境・ボランティアなどの
情報を掲載する地域密着型情報紙です。

２０２２年１１月号

原発事故被災地訪問報告
ユーカリフェスタでも写真展（P.３に紹介記事）

交野に久保元校長を招く会
（P.７に紹介記事）

今年もやります！
ひらかた多文化フェスティバル
（P.６に紹介記事）

- 天国への階段　十二　転んだあとの杖
- ２０２２年夏の原発事故被災地訪問報告
- 「共に学ぶ」教育はどうなるの？（３）
- ソフトボールチーム「オールメゾン千里丘」
- 今月の五行歌
- ひらかた多文化フェスティバル
- 交野に久保元校長を招く会
- イベント紹介／会計報告

「ＬＩＰ編集局」
https://love-dugong.net/lip/
連絡先
メールアドレス：lip@love-dugong.net
TEL：070-5653-6913（18 時以降）

LIP とは……Local Information Paper の頭文字をとったものです。

「天国への階段」～十二～

転んだあとの杖

鶴島緋沙子

〝転ばぬ先の杖〟と言うほど先見の明もない私は、今までの人生、ほとんど「転んだあと」持つべきだった大事な杖に気付くという不甲斐なさで過ごしてきたように思う。とと言いながらも、もしも、前者を優先していたら、今の私はいない。ということは言えるかもしれない。

足腰の痛みや、衰えを実感する昨今、ははん、ここで人生初めての杖の出番なのかと気づいても、孫が早々と買ってくれた花柄模様入りの洒落た杖も、何で私が、今更、三本足で歩くのと、心中波風しきり。

その上、聴覚の衰えを補うのに両耳に補聴器を息子からプレゼントされ、面倒ながら付けてはみるが、昨今のコロナ予防の為のマスク着用で、両耳は、金縛りのようになっている。

もうこの歳になれば、なるようになれと専ら〝転ばぬ先の杖〟には、抵抗している次第である。

だがしかし、現実は、〝自閉症〟と名付けられた、五十九歳になる次男と二人暮らし。何かにつけて彼に頼らざるを得ない毎日だ。

〝転んだあとの杖〟では、彼の負担が大きくなり過ぎる。時に付き合ってくれる食糧買い出しには、いつも彼の左腕に右腕を預け、その大きな体に寄り添って行く。

思えば、例えばジャムの瓶開け、缶詰の缶切りなど私一人では、到底出来ない日常茶飯事を軽々とこなしてくれる。そんな男が一人身近にいる、この便利さ。

またもや、だがしかしである。今のところ、彼の週三日の仕事日や一日一回の散歩時間、私一人の時に、〝転んだあとの杖〟が必要になったら、いかがいたしたものか。

ままよ、まあいいか。その時はその時、もうそろそろどころか、はっきり見えている天国への階段。

登るとしようか。と思った瞬間、杖を持つ間もなく真っ暗な地獄へまっしぐら。

となるのもまた一興かな。

人生、終盤に近づくと〝転ばぬ先の杖〟も〝転んだあとの杖〟ももうどうでもいいや、なるようになれと妙に達観してしまうものかも知れない。

いやいや、あとわずかになったこれからの人生、〝転んだあとの杖〟が、ベッドだけとは何としても切ない。せめて、生き残っている古くからの友人と、たまには、顔を合わせ思い出話に花を咲かせたいではないか。それには、三本足で歩くのもまた楽し、ではないか。

もしも、三本どころか四本足の車椅子になったとしてもいいじゃないか。あの世とやらへ行くのにこれ程楽なことはない。その上、車椅子を押してくれるのが、ハンサムなお兄さんで、六本足の〝転んだあとの杖〟の、この楽しさ。

おっとっとっと、目の前に石ころが。くわばら！くわばら！

鶴島緋沙子さんは、山田洋次監督の映画「学校Ⅲ」の原作となった「トミーの夕陽」（つげ書房新社刊）などの作品で知られる枚方市在住の作家。「大阪府高齢者大学校エッセー文学科」「大阪府民カレッジひらかた校」等講師。『「トミーの夕陽」がまた昇る』『私の中の瀬戸内寂聴』『もぐらの目』など。「自閉症」の息子さんの母親であり、「枚方自閉症児(者)親の会」の元代表。

２０２２年夏の原発事故被災地訪問報告

双葉町双葉駅前
　復興公営住宅の建設が進んでいる

大熊町大野駅前商店街　　２年前には人のいない駅前商店街が続いていたこの場所も解体が進みほとんどが空き地に。今頃は何の建物も残っていないだろう。

今年の夏も福島県の浜通り（太平洋沿岸）地域の原発事故で被災した地域にボランティアを兼ねて訪問してきた。最近は、帰還困難区域（事故後何十年も済むことが出来ないとして指定された避難区域）の中に特定復興再生拠点区域という重点的に除染を行い、先行して帰還できる地域をつくるための工事や除染作業が進められたことで、今まで入ることの出来なかった地区に入ることが出来るようになった。今まであったフェンスやゲートが取り除かれた地域は、どんどん建物の解体がすすめられ、空き地が広がっていく。

そんな特定復興再生拠点区域として双葉町の一部が解除されたというニュースが８月末に流れた。画面には「解除を歓迎する人たち」や自宅に帰って「元の生活に戻れる」と笑顔の住民の姿が映し出される。でも、そのわずか１ヶ月前にこの町に行った私は「本当にみんながそう思っているの？」と思う。町のほとんどが１１年間人の住まない傷んだ家と、空き地が広がり、ＪＲ双葉駅前のほんの一区画に復興公営住宅が建設されているだけ。年金生活の老人なら仕事のないこの地域に住むことも出来る。しかし、この地域にまだ仕事はあまりない。（今後は工業団地的なものもでき、職場は出来そうだが）商店や病院もあまりない。何よりも、事故が起きるまでそこに当たり前にあった暮らしも、地域のコミュニティーもそこにはない。画面に映るような華やかな「復興」がそこにあるとは思えない。

今年の８月には富岡町の夜の森地区、大熊町の大野駅前、双葉町の双葉駅周辺、浪江町の浪江駅周辺などに行った。冬に行った時よりも空き地が広がっている。人のいなくなった町、家も何もなくなっていく町に立ち、１２年前のこの町を想像する。この町で当たり前に暮らしていた人たちが今ここに立ったら何を感じるんだろうかと。自分が暮らした町には思い出や様々な思いがある。この現状でそんな思い出を思い出せるのだろうかと思う。ここに住んでいた人たちはある日突然追い出されてすべてを奪われ、今新しい土地で新しい生活を築き始めている。そんなときに「ここにもう還っていいですよ。帰ることが町の復興ですよ」と言われたらどう思うのだろうか。

還れる人、還りたい人、もうすでに今の生活の地が故郷になった人、還りたい気持ちと還れない気持ちで苦しむ人等いろんな人がいるはず。夏の終わりの報道を見て、どれだけの人がそんなたくさんの人の思いを想像したんだろうか。結局被災者は取り残され、見捨てられて行くのではないかと思った。

１１月１０日夜にわたしたち「あいむひぁ大阪」がクレオ大阪中央で報告会をします。また、１２月３、４日には枚方市南部生涯学習センターのユーカリフェスタに今年撮って来た写真も少し展示します。被災地の今を見に来てください。

文／写真 木村英生（大阪市立中学校教員）

【あいむひぁ大阪　原発事故被災地訪問現地報告会】
今年の８月に訪問した福島県の原発事故被災地を訪問した時の現地の状況や、いわき市の放射線市民測定室たらちね訪問の報告などをします。
日時：１１月１０日（木）１８：３０～
場所：クレオ大阪中央
参加費無料　当日お越しください。

【ユーカリフェスタで写真展】
日時：１２月３日（土）９：３０～１６：００
　　１２月４日（日）９：３０～１５：００
場所：枚方市南部生涯学習センター

文科省通知で、支援教育が変わろうとしている……。「共に学ぶ」教育はどうなるの？（３）
元当事者からの発信「嬉しかったこと、なんだかなぁと思ったこと」

障害がある子も「共に学ぶ」教育の先進ともいえる大阪府。枚方市では、「支援教育」という言葉を使い、支援学級の児童生徒は、１日１～２時間を支援学級の教室で学び、その他の時間は通常クラスで他の児童生徒と共に授業を受けています。

さて、『ＬＩＰ』８月号 10 月号でもお伝えしたとおり、文部科学省から 4 月 27 日付で、支援学級の子どもについては、週の授業時間の半分以上を目安に支援学級で授業を行い、通常クラスでの授業は半分以下にするように、という通知が出されました。それを受けて、市の支援教育が変わろうとしています。

では、当事者である子どもたちはどう感じているのでしょう。10 月号で、元当事者として発言してくださった、Ｓさん（枚方市在住・21 歳）から、小・中学校時代を振り返って、さらに詳しいレポートをいただきました。

「支援学級で、感じたこと」

小学校の時の支援学級では、高学年になると合科の時間が、あまり好きではなくなりました。お芋掘りや、季節の折り紙（こどもの日が近いと、かぶとを新聞紙で折ったり）。特に折り紙は苦痛で、先生方に手伝ってもらうのですが、自分でやりたい。でも、できないから、手伝ってもらう。の繰り返しで、やりたいのに、できないことが、何よりも悔しかったです。小・中・高と今も、悔しい気持ちになることが、凄くあります。

ここから中学校での話に入ります。小学校の時には、支援学級の教室に行く前に、クラスのみんなの前で、Ｓクラス行ってきますと言ってから、行くのが普通だったので、中学でもそれをしてたのですが、２年生になるとなんかめんどくさくなってしまい、言わないで行くことにしました。

中学の支援学級では、ヨガマットを持ち込んで、横になる時間を設けてもらいました。後は、構音障害があるので、コミュニケーションの練習で先生とおしゃべりをしたりも、しました。

肢体不自由の支援学級は、１年の時は先輩と同級生がいましたが、２年になるとその先輩が卒業してしまって、同級生は引っ越ししてしまって、私１人でした。

中学の、合科の時間は週一回必ずあって、小学校の時は学期ごとに数回だったので、週一回ある事にまず最初驚きました。内容は、ほとんど工作で、全然楽しくなかったです。合科の時間と、好きな国語の授業が被って、好きな教科の授業に出れないのが、嫌で、1 年生の時は被っても、国語の授業に出ることを許してもらえてたのですが、２年生になると校長先生に、やっぱり合科に出ないとダメと言われて合科に参加していました。

合科に出たり支援学級に行っていたりすると、授業１回分が抜けてしまい、1 回分進んでしまいます。なので、よく先生方が前回の続きからするよ。と言われても、前回出られてないので、何の事か分からない事が多々あって、困っていました。

あと、支援学級の話とはちょっとズレるかもしれませんが、私は小中学校の時、体育の時間に、私は着替えるのが遅いので、授業を途中で抜けて、支援学級で着替えていました。必要な配慮をしてもらっていた事には、感謝していますが、私は途中で授業を抜けるのが嫌でした。

それと、1 回でいいから、教室でみんなと着替えたかったです。

図工や美術、技術家庭科などの時、私は難しい事が多いため、先生方に手伝ってもらっていましたが、ほとんど先生がやるため、私の作品ではなくて、先生の作品になる事が多かったです。なんだかなぁ。といつも思っていました。

校区の端に住んでいるため、歩いて行くとそれだけで体力が奪われて、授業等に支障がでてしまうため、小学校の途中から、中学卒業までタクシー通学をしていて、それも必要な配慮をしてもらっていたのですが、私はみんなと集団登校で行きたかったし、みんなと帰りたかったです。多分みんなは、私が羨ましかったかもしれませんが、私はみんなの方が羨ましかったです。

でも、中２の時職場体験で、保育所に行くことになり、その名札を家庭科で作る事になりました。同級生が、手伝ってくれた事があって、嬉しかった思い出があります。

中学の部活は、茶華道部（多分今は茶道部になっています。）に入って茶道のお稽古をしていました。中１の時に、悔しかったのが基本の作法が、どうしてもできなかった事です。みんなは、次々に合格していくのに全然できなくて、凄く悔しかったです。でも、お茶会に半東という掛け軸の説明をしたり、お花の説明をしたり道具の説明をしたりする、役割で参加をしたりして、支援学校ではできない体験ができました。

３年生の時には、1 年生の時にはできなかった基本の作法ができるようになり、一番難しいお点前で、お茶会に出ることができて、最初で最後のお点前ができて、凄く嬉しかったです。夏には、学生が集まってする大規模なお茶会に参加して、その後、部員のみんなでファミレスに行ったり、楽しい思い出があります。

困っている時には、同級生に助けてもらったり、友達も何人かではありますが、できて、私は、地域のＳ小学校と、Ｓ中学校に行って良かったと思っています。

少しでも、参考になれば、嬉しいです。（Ｓ）

「まだ続きがあるんです」と、ＬＩＮＥで送ってもらった、Ｓさんの発信を読んで、そうか、なるほどと思いました。配慮のためにみんなと一緒にいられないことが嫌だったとＳさんは書いています。配慮は必要なのだけれど、それを当人がどう感じているのか、それを確かめることがされていない場合が多いように思います。まず、「どうしてほしいのか」と聞く。「どうしたいのか、自分の気持ちを言っていいんだよ」と伝える。そういうことが足りないのではないかなぁと思いました。そこを変えていきたいものです。

引き続きこの問題について、私たちも考えていきます。

次回の定例会は、12 月９日（金）10 時 30 分から、ラポールひらかたで行う予定です。

（まとめ・構成）
放課後クラブ「チャレンジ・キッズ」設楽理絵・豊髙明枝

私の住居（すまい）　続編
ソフトボールチーム「オールメゾン千里丘」

立石　健一

私が一九七八年から今も住んでいる吹田市は、市民の健康増進を目的にした体育振興に驚くばかりに熱心な町であった。

市役所には体育振興課があり、日曜、祭日には小学校、中学校の校庭が地域住民に解放されるのでソフトボールチームは練習場所に困ることがなかった。体育館も同様でそちらではバレーボールやバドミントン・卓球などを楽しむグループがあった。

そして市には万博公園をはじめ山田球場、桃山台、江坂公園、淀川河川敷などにソフトボールと少年野球場を兼ねた立派な球場がある。

当時、吹田市ソフトボール連盟には一六〇チームもの登録チームがあって、上位からA級二〇チーム、B級四〇チーム、C級約一〇〇チームという構成だった。各級ごとに春と秋に市長杯争奪大会が開かれる。そしてA級の大会はそのままが全国大会の予選であり優勝チームは大阪府代表決定大会へ駒を進める。

さて、初参加の我々チームは当然ながらC級からの出発である。しかし、〝ソフトボールは遊びでしかやったことがない〟とはいうものの、ほぼ全員が野球経験者であり自信満々であった。直前の練習試合でも長打を連発して相手を圧倒していた。

そして迎えた初戦、何と負けたのである。どう見ても格下の相手にいいように掻き回されて惨敗。続く秋の大会も二回戦負け。

はやくもチームは危機を迎えた。

総会を兼ねた泊りがけの忘年会は熱を帯びた。「単なる遊びなら辞めたらいい。練習をもっと真剣にやろう。A級を目指してやろう」

この発言者は、かつて四国の強豪高校で鳴らし関西の社会人野球で活躍したというKだった。「だけど所詮はレクリエーションクラブなんだからそこまで入れ込まんでもいいじゃないか。俺はこの際身を引くよ」

二十二名がいたメンバーは十六人になった。チームにはKの他、関西六大学のレギュラー遊撃手だったM、同じく外野手のHなどもいてメンバー構成的には負けるはずがないのである。

しかし勝てない。ソフトボールのゲームは予想以上に〝小技〟がものをいう。ホームランなどそうそう打てるものではない。指示を出す監督が必要だった。次にどうしても必要なのはウインドミル投手の育成であった。この投法は一種の特殊技能で野球の経験があっても急には身に付くものではない。一般には三年はかかると言われている。チームで一番若いMに頼むことになった。彼は水道局の浄水場勤務で勤務の合間に練習が可能だと言う。

監督も五十五歳の適任者が見つかった。

さあ、満を持して迎えた二年目。投手のMも何とか格好はついて来た。

春はベスト一六で惜敗したが秋は五度勝って遂に決勝戦へ進んだ。桃山台球場には、日頃は〝家族サービスなどそっちのけでソフトボールのあとには飲み会ばっかりやりやがって〟と冷ややかだったカミさん連中が子供を連れて駆けつけ黄色い声の声援に観客席が盛り上がった。

〝勝った！優勝！〟カミさん連中も手を叩き合い躍り上がって喜んでいた。

三年目、B級に昇格した。振り返るとこの頃のチームが一番充実していた。

B級二年目、チームとしては四年目の秋の大会決勝まで進み惜敗したが堂々の準優勝だった。

そして五年目、遂にA級に昇格を果たした。（A級はボールが皮製に変わり捕手の防具も硬式野球並みになり打者のヘルメットは耳カバー付きが必要になる）

A級十八チームの頂点には国鉄・吹田（当時）チームが君臨しており全国大会の常連だった。

A級で初戦、くじ運悪くいきなり、この国鉄・吹田と当たった。

〝一泡吹かせてやる〟つもりが相手投手のボールにバットがまるで当たらない。〝速い、曲がる、落ちる〟。三振十一個を喫して五回コールド負け。レベルの違いを思い知った。

それでも試合内容が評価されたのか三年間は降格せずA級で戦ったが結果は一勝六敗。記念碑的な一勝の相手は〝正露丸〟の大幸薬品チームであった。

再びB級に、さらにはC級に降格したがメンバー全員に満足感があり「もう全員四十歳を超えているわけだしC級でいいじゃないか。まだ何試合かは勝てるだろうし楽しんでやろう」

その後もチームは全員が五十歳を超えるまで続いた。好きなこととは言えよく頑張った。

振り返って見て家族に多少の迷惑をかけたのだろうとは思うが、このマンションに移り住んだ時には、このような友人・仲間が出来るとは想像もしていなかった。つくづく住んで良かったと思っている。

現在、年に二回はOB会を開いている。既にメンバー中、七名が亡くなっている。転居先から参加する者も四名居る。（了）

「大阪府高齢者大学」文章講座卒業生でつくる「鶴島学校」の立石　健一さんの作品です。講師をつとめる鶴島緋沙子さんの推奨作品。

ＬＩＰが選ぶ 今月の五行歌

カタツムリ君よ
いきなりつかんで
びっくりさせたな
植え込みに置いたから
もう轢かれる心配はないで

ちえこ

私以上の
私になれない
しかと心得よ
めいっぱいの
私を生きよ

さなぎ

昔、本屋で
わけ有り本を探すのが得意だった
今、スーパーで
わけ有り野菜を探すのが
得意である

いぶやん

五行歌（ごぎょうか）とは……五行で書く短い詩。字数や季語などの制限はなく、自分のおもったこと、感じたことを、そのまま言葉にして書きます。枚方では、五行歌ひらかた歌会が、８月を除き月一度歌会を行っています。
（連絡先：akkie.toyotaka@gmail.com
または 090-5893-5635・豊高）

ひらかた多文化フェスティバルで、出会おう、つながろう

１１月２７日に開催の“ひらかた多文化フェスティバル”は、今回２２回目を迎えます。枚方に住むさまざまな文化を持つ人たちが、出会い、ふれあい、世界各国の文化をつなげようと、２０００年秋に始まりました。今年は、飲食スペースも設け、民族料理を味わいながら、舞台のパフォーマンスを楽しんでいただけたらと思います。

さて、ひらかた多文化フェスティバルは、“サマースクール・秋のつどい”２０周年を機会に、その成果をさらに発展させようと始まりました。当時は、枚方市国際交流協会（枚方市文化国際財団の前身）を中心に市民団体で実行委員会を立ち上げ、枚方市多文化共生教育研究会・教育委員会・社会教育課・関西韓国ＹＭＣＡもオブザーバーとして参加する、官民一体となった取り組みでした。その後も枚方市文化国際財団が中心となり継続してきたところ、２０２１年３月枚方市文化国際財団が解散となりました。

実行委員会に参加の私たち市民団体は「日本に住む外国人がますます増え、国際交流の必要性はいっそう高まっている」「枚方の国際交流のイベントをなくすことはできない」「２０年の歴史を途絶えさせるのは残念だ」と意見を出し合い、コロナ禍の不安の中、準備を進めました。最大の問題は開催に伴う資金繰り、財団が集めてくれた協賛金を私たちの手で集められるか？それこそ一丸となって、団体・個人を問わず集め、昨年２１回目を無事開催することができた

昨年の様子

のでした。第２１回のフェスティバルにご協力いただいた多くの団体・個人の皆様、本当にありがとうございました。

今年の実行委員会には若い仲間も加わり、たいへん心強く思っています。枚方の国際交流の火を絶やさない、互いに理解しあい、誰もが安心して豊かに暮らせる、そんな枚方市に住み続けたい。

祭りでたくさんの人たちと、出会い、ふれあい、つながっていきましょう。

ひらかた多文化フェスティバル実行委員会
（佐藤）

☆日時　11 月 27 日(日)10 時～15 時
（小雨決行）
☆場所　ニッペパーク岡東（岡東中央公園）
☆催し物　民族(音楽　舞踊　料理）民芸品
展示　フリマ　子どもの広場
＊なお、会場内の感染防止にご協力ください

～ 「生き抜く」世の中ではなく、「生き合う」世の中へ ～

交野に久保元校長を招く会

学校現場は今、子供たち誰もが、自分を認めてもらい、生き生き、伸び伸びと過ごせる場所だろうか。学校の先生も、子どもたちも、しんどい思いをしているのではないだろうか。こんな疑問が、頭を離れません。

そこで私たちはまず、「今の教育現場について考え合う機会を」と、久保敬さんの講演会を企画しました。

久保さんは、元大阪市立木川南小学校の校長先生です。コロナ禍でオンライン授業が導入されたことをきっかけに、２０２１年５月、松井一郎大阪市長と教育長宛に「提言書」を郵送しました。「提言書」が知人を介してＳＮＳで広まったこともあり、市教委は信用失墜行為に当たるとして、久保さんを文書訓告処分としました。

しかし、提言書に共感する人も多く、久保さんとの対談や、講演会が各地で催されるようにもなりました。

「提言書」には、「学校はグローバル経済を支える人材という『商品』を作り出す工場と化し、子どもたちはテストによって選別される『競争』にさらされる。教員は何のためか分からない仕事に追われ、疲弊していく」との趣旨が記されています（＊）。

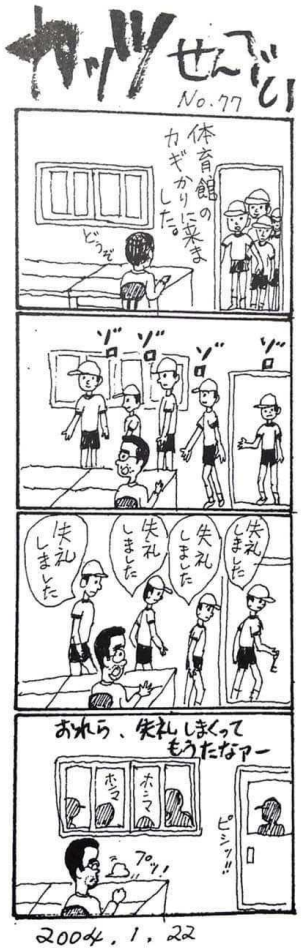
私たちは、頑張っている先生をねぎらいたい。応援したい。学校が、先生もしんどい、子どももしんどい場所になっているなら、地域の住民として、できることをしたいと考えています。

久保先生は、「社会の課題のしわ寄せが、どんどん子供や学校に襲いかかっている。過度な競争に打ち勝ったものだけが『頑張った人間』と評価されるが、誰もが幸せに生きる権利を持っている。『生き抜く世の中』ではなく、『生き合う』世の中でなくてはならない」（＊＊）と「提言書」で述べています。　「生き合う」世の中…今の時代、これからの時代にも、必要なのはこれではないでしょうか？

久保さんの講演会は、「子どもをまんなかに、育ちあうつながり　久保元校長が『提言』に託した思い　」と題して行います。

一緒に、子ども・学校・地域について、考え合いませんか？　参加をお待ちしています。

（＊、＊＊＝「毎日新聞」2021 年 9 月 30 日夕刊に掲載された「要旨」から引用）



失礼しました

◆日時：11 月 5 日（土）午後２時～４時 20 分
◆場所：「いきいきランド交野」１階会議室
◆参加費＝資料代として５００円
◆主催：交野に久保元校長を招く会
◆問合せ先：katano.manabi@gmail.com

イベント・サークル・ボランティア情報

未来を創るスタディサークル

■日時：２０２２年１１月５日（土）１４：００-１７：００
■会場：サプリ村野　２０２号室　枚方市村野西町５−1
■主催／連絡先：NPO 法人スノック　snoknpo@gmail.com
■参加費：無料

スタディサークルはみんなで学ぶ大人のコミュニティ。
自分達が学びたいと感じたことを、自由に学ぶゆるい関係づくりを目指します。
今回のテーマは『「幸福の国」デンマークを根源から支える「ホイスコーレ(生のための学校)」について学ぶ』です。
デンマークを「幸福の国」としている要因の一つに、デンマーク発祥の成人教育機関「フォルケホイスコーレ」があると言われています。
ぜひ一緒に学びましょう！

【枚方自閉症児（者）親の会】

「こんな学校なら行きたい」「もっと多面的に学校や社会のことを話したい」など、自由に話せる場にしたいと考えています。
親の会は1966 年に設立し今も続いている会です。
発達障害全般、二次的に不登校、ひきこもりになっている人の保護者の方、祖父母の方、話したい方々、フリートークの場に集まりませんか？
◆日時：11 月 16 日（水）10：00〜12：00
◆場所：ラポールひらかた ４階共用ルーム
※連絡先 松崎 072-845-3014　さんなみ 072-868-9929

【参加者募集】　放課後クラブ「チャレンジ・キッズ」情報交換・交流会

子どものことで、迷ったときに相談したり、悩みを打ち明けられる場があればいいなぁ……。そんな思いで集っています。支援者を交えて、気楽におしゃべり情報交換しませんか。
◆日時：12 月 9 日（金）10 時 30 分〜15 時
（遅刻早退ＯＫ、出入り自由）
◆場所：ラポールひらかた４階研修室４
◆参加費：無料
◆問合せ：c-k@love-dugong.net または、
090-5893-5635（16 時以降　豊高）
下記ブログにて、随時情報を掲載しています。
http://ameblo.jp/challengekids81573/
（「チャレンジ・キッズ」「アメブロ」で検索してください）

【統一教会問題と平和憲法の価値】

◆日時　１１月２０日（日）　１４：００〜１６：００
◆会場　青年の家２０１号室
（京阪交野市駅から徒歩４分）
◆講師　西谷文和さん（フリージャーナリスト）
◆主催　憲法とくらしを考える会
◆連絡先　０７２−８９２−４９３８（松村）
◆参加費　５００円

フリージャーナリストの西谷文和さんをお招きし、お話を伺います。
旧統一教会問題が注目を集めていますが、西谷さんに自民党や維新と統一教会とのつながりやまた、ウクライナ等の世界情勢、それから現行憲法の価値など幅広い観点からお話していただきます。どうぞご参加下さい。

イラスト　表紙：平井由恵

応援ありがとうございます♪

ＬＩＰ応援団

匿名希望さん

ＬＩＰ会計報告（前号以降）

金額(円)	内容
43,227	前号から繰り越し
3,800	イエローレシート寄付
1,000	書籍販売（ＮＰＯフェスタ）
2,000	寄付
▼ 790	郵送代
▼ 515	封筒代
▼ 220	ゆうちょ手数料
▼ 500	ロッカー代
▼3,990	１０月号印刷代
44,012	計（次号へ繰り越し）

STOP WAR

◆世の中急に動き出したのか、ポン菓子屋さんへの依頼が急増しました。ほぼ毎週のように出動予定。
・１１月３日：柳川ふれあい祭り（高槻）
・１１月５日：穂谷某所でのイベント
・１１月２７日：多文化フェスティバル（市役所前）
・１２月４日：子ども食堂全員集合（ビオルネ前）
３年ほどほとんど出番がなかったので、腕も機械も錆びついてるかも。先日は、ＮＰＯフェスタで、これも３年ぶりくらいの「しゃぼん玉おじさん」もやりました。体力が落ちてて、１日やるとヘロヘロに。１１月にはもうひとつ、柚子狩りの話がまとまり、そこでは、手焙煎コーヒーもやることになってます。なかなかペースがつかめませんが、ひさびさのイベントを楽しもうと思っています。
（w）

◆ＬＩＰは、市民が書き市民が読む、地域密着型情報紙です。あなたも書いてみませんか？

枚方コーしん
デビューしちゃう？
【ひらつーパートナー・ライト】
月額 5,610 円
詳しくはコチラ➡➡